

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著
来住道子／訳

セイコー——時をとらえ、差をつける

第一八回オリンピックの開催地が東京に決定という発表がIOCより出された一九五九年、セイコーの服部正次社長は、東京大会の公式計時はセイコーの手で行おうと決意した。そして一九六一年には、「オリンピックの公式計時機器の開発に乗り出す」という方針を打ち出した。それは日本の時計メーカーとして社運をかけた事業だった。

この方針に時計開発部のリーダーの一人、井上三郎はかなり戸惑いを感じていた。それにはそれなりの理由があった。「オリンピックの計時機器など見たこともありませんでしたからね」と井上は言う。「ストップウォッチがどのように使われ、どんな種類のものが必要なのか、見当もつきませんでした。コンピュータでシミュレーションしてみることもできませんでした。だから、試行錯誤しながら一つ一つ作っていくしかなかったのです」

しかし、二〇一二年の『デイリー・テレグラフ』の記事に書かれているように、セイコーの場合も知らないことが功を奏した。

当時、公式計時を担う企業の選定は、オリンピック開催国の組織委員会に一任されており、オメガやロンジンといった、実績のあるスイスの時計メーカーが選ばれるものと見られていた。それまでのオリンピックで正確な計時を実践できる企業として認められていたのは、その二社だけだったのだ。

それに対して、セイコーはスポーツ専用の時計を作った経験などまるでなかった。それでも服部社長や当時の日本には、こんな自信があった——やろうと思えば、何でもできる。

オリンピックの計時を受け持つことができる保証など何もなかったが、服部社長の要請でセイコーのグループ会社三社がオリンピック関連事業にあたることになった。その柱となったのは、大型時計やストップウォッチ、クリスタルクロノメーター（携帯型水晶時計）、そして新たに独自開発した、レース直後に選手のタイムを自動で印字できる装置である。この装置はプリンティングタイマーといい、競技結果の判定方法に大きな変化をもたらした。

わずか二年のうちに、セイコーはスポーツ競技用のストップウォッチを開発し、国際陸上競技連盟（IAAF）のテクニカル・コミティーの基準をクリアした。ユーゴスラビアのベオグラードの競技場で検定が行われ、IAAFの目の前で見事な結果を出し、日本製のストップウォッチが精密で信頼できるものであることを実証してみせた。

セイコーはすでに小型時計のクォーツテクノロジーの開発に成功しており、その技術をマラソンのような長距離レース向けに応用した。このクォーツテクノロジーの開発をさらに進め、長時間でも正確に時を刻む腕時計が誕生することになった。

おそらく選手にとってさらに重要な意味をもったのが、プリンティングタイマーの開発である。この装置は、トラック競技のタイムを一／一〇〇秒まで自動で計測して印字するというものだ。一九六四年



の東京オリンピックでは、肉眼での判定が難しいレースで大きな力を発揮した。女子八〇メートルハードルの決勝がまさにそんなレースだった。

一〇月一九日、国立競技場で東西統一ドイツのカリ
ン・バルツァーと、ポーランドのテレサ・チェプラがス
タート位置についた。スタートのピストルが鳴り、ケー
ブルを通じて電子信号がプリンティングタイマーに送ら
れる。同時にその信号によって、ゴールの瞬間をとらえ
る特殊写真を撮影するカメラと、観客用大型時計も起動
する。

レースはバルツァー、チェプラ、そしてオーストラリ
アのパム・キルボーンの三つ巴の戦いでほぼ同時にゴールし、三人とも記録員の計測では一〇秒五という同タイムという驚くべき結果となった。一／一〇秒まで計測できるストップウォッチで何人もの記録員がタイムを取っていたが、金メダルを判定することはできなかった。

三人に金メダルを与えるわけにもいかななから、頼
みの綱となったのが、日本の最新の計時テクノロジーだ
った。

三人がゴールした瞬間は、日本写真判定株式会社が開発したスリットカメラがとらえていた。三〇秒後には、撮影されたネガが反転処理され、三分でプリントされた。プリンティングタイマーのデータは、一／一〇〇秒ごとの瞬間をとらえており、それは一つの画像としてまとめられる。その画像には選手だけではなくタイムも表示されるので、三人の順位もこれによって判定することができた。

プリンティングタイマーのおかげで、バルツァーが一〇秒五四で金メダル、〇・〇一秒差でチェプラが銀メダル、そしてキルボーンはさらに〇・〇一秒という僅差で銅メダルとなった。IAAFの公式記録は一／一〇秒までしか認められていなかったが、このレースに関しては一／一〇〇秒までとらえる電子計測タイムが正式記録として認定された。

プリンティングタイマーの多大なる力によって、タイムを競うスポーツは進化し、世界的に有名なプリンタメーカーE P S O N——son of electronic printerにちなんだ社名（訳注：EP-101という世界初の小型軽量デジタルプリンタのような製品 [息子SON] が次々に誕生するように願ってつけられた社名）——が誕生することになった。

一九六四年はセイコーの時代。

まさに日本の時代だった。